

檸檬

映画文学人生論

梶井基次郎 (1901-32)

『檸檬』 (1925) 「青空」

『冬の日』 (1927) 「青空」

『冬の蠅』 (1928) 「創作月刊」

『桜の樹の下には』 (928) 「詩と詩論」

えたいの知れない不吉な塊が 私心を始
終圧 (おさ) えつけていた

梶井基次郎の『檸檬』には毒がある。国語の教科書に採用されたことがあるそうだが、教育者はこの小説を生徒に読ませて、どのような教育的効果を期待するのだろうか。

えたいの知れない不吉な塊が私の心を始終圧 (おさ) えつけていた。焦燥と云おうか、嫌悪と云おうか——酒を飲んだあとに宿酔 (ふつかよい) があるように、酒を毎日飲んでいると宿酔に相当した時期がやって来る。それが来たのだ。これはちよつといけなかつた。結果した肺尖カタルや神経衰弱がいけないのではない。また背を焼くような借金などがいけないのではない。いけないのはその不吉な塊だ。

私は若い頃、この文章を読んで、全身に毒がまわるような気分を経験した。えたいの知れない不吉な塊という毒に感染し、それが半世紀たった今も心か体のどこかに残っている。

『檸檬』の主人公は、寺町通りの果物屋でその店には珍しい檸檬が出ているのを見た。彼は檸檬が好きだった。レモンエロウの絵具をチューブから搾り出して固めたようなあの単純な色も、それからあの丈 (たけ) の詰まった紡錘形の格好も。

——結局彼はそれを一つだけ買うことにした。



檸檬

映画文学人生論

それから彼は長い間、街を歩いた。始終彼の心を圧えつけていた不吉な塊がそれを握った瞬間からいくらか弛（ゆる）んで来たともみえて、彼は街の上で非常に幸福であった。

何処をどう歩いたのか、彼が最後に立ったのは丸善の前。生活がまだ蝕まれていなかった以前、彼の好きな店だったが、近頃は避けていた。

「今日は一つ入って見てやろう」と、彼ははずかずか入っていった。然し、どうしたことか、彼の心を充たしていた幸福な感情は逃げて行った。憂鬱が立てこめて来る。

彼は画本の棚の前へ行って、画集を一冊づつ抜き出しては見、そして開けては見た。しかし、以前にはあんなに彼をひきつけた画本が堪え難いものになっている。彼は憂鬱になってしまつて、自分が抜いたまま積み重ねた本の群を眺めた。

「あ、そうだそうだ」その時、彼は袂の中の檸檬を憶いだした。本の色彩をゴチャゴチャに積みあげて、一度、この檸檬で試してみたら。

彼にまた先程の軽やかな昂奮が帰って来た。彼は手当たり次第に画本を積み上げ、幻想的な城をつくつた。その城壁の上に恐る恐る檸檬を据えつけた。すると、それをそのままにしておいて、何食わぬ顔をして外へ出た。——という話である。

今の私には、檸檬の憂鬱な毒がなつかしい。

うつうつと一個のれもん妊れり 三橋鷹女